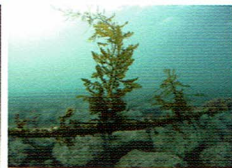


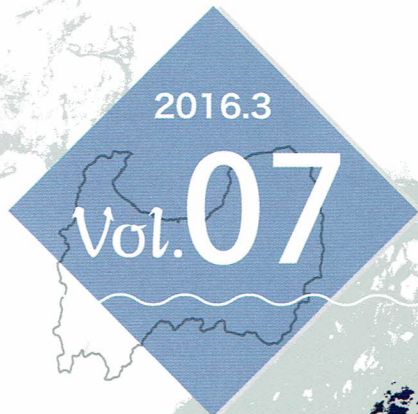


NPO法人 富山湾を愛する会
「会誌」

T O Y A M A - W A N



富山湾



富山湾を知り、守り、活かす。

◎ 会誌第7号の発行にあたり

- 良き師と仲間に恵まれて7年
- 射水市海老江の海岸
- 「富山湾のさかな」雑感
- 富山湾と駿河湾
- 富山湾の海中点描 3
- 富山の商船・水産学校の練習船について

◎ NPO法人「富山湾を愛する会」活動の1年

会誌第7号の発行にあたり

会長 高見貞徳

2015年10月24日(土)25日(日)に、天皇后両陛下をお迎えし、「第35回全国豊かな海づくり大会」が、海王丸パークを中心に開催され、当会も、射水市豊かな海を愛する会とともに参加いたしました。同時に「海藻おしば協会」の海藻おしばづくり体験ブースの運営に協力し、大勢の来場者でにぎわいました。

当会の事業も7年目となりました。理事をはじめとする会員の皆様の、富山湾に対する思いとご協力により、派手さはありませんが着実に事業を実施してきたと自負いたしております。あらためてお礼申し上げます。発足以来続けてまいりました藻場の造成事業は、一昨年昨年に引続き「射水市豊かな海を愛する会」に参画することにより、青少年対象の教育普及関連事業を含め実施いたしました。

10月18日(日)には「海辺ウォーキング in 海老江」を開催しました。また、富山県からの受託事業である「伏木富山港利用

促進PR活動事業」は、事業実施内容が高く評価され、今年度は、規模は大幅に縮小されましたが、「ポートセールス協議会」の委託事業として取り組みました。引続き神田さんに専任で担当してもらい順調に終了しております。

さて、私事にわたりますが、すでに一部の皆様にご案内いたしておりますように、私高見は、高齢に達したことなどもあり任期中中ではありますが、理事の皆様のご承認も得てこの3月をもちまして、理事及び理事長を退任させていただくこととなりました。7年間にわたり重責を果たすことができましたのは、ひとえに会員及び関係者の皆様のおかげであり、厚くお礼申し上げます。今後のことにつきましては、理事の皆様と十分に協議をいたしまして、運営に支障をきたすことの無いようにいたしておりますのでご安心願います。なお、新理事、理事長は4月の定時総会で選出されます。

富山湾を愛する会の末永い継続と、会員及び関係の皆様のご発展をご祈念申し上げます。

良き師と仲間恵まれて7年

会員 林 節男

2016年1月17日、富山国際会議場で開催された梶田隆章さんのノーベル賞受賞記念講演会に参加した。これまでの富山県民からの支援に応えたいと、本研究の意義と、これまでの研究経過、今後の計画について1時間余り丁寧に話をされた。講演の冒頭で世紀の大発見「ニュートリノの質量の発見」に至った幸運として、大学院で良き師(小柴昌俊先生、戸塚洋二先生等)と良き仲間(カミオカンデのスタッフ)に恵まれたことを強調された。わが富山湾を愛する会でも実に良き師(高見貞徳理事長、石森繁樹事務局長)と良き仲間(会員、アイベックのスタッフ、海老江漁協の皆様)を得て7年間、充実した活動を行うことができた。その間の記録は会誌1～6号にまとめてある。また海藻おしば教室の開催など小学生向けの環境教育活動も行ってきた。

私は2015年春に本会の市民への活動紹介の必要性を感じ、理事長と事務局長の了解のもと展示発表を企画した。真夏の開催になったが、射水市において活動展示発表会、公開セミナー、ウォーキングin海老江を開催した。その時に作成した

チラシを稿末の写真で示す。

展示会の題目は「今の富山湾をみつめ、さらに豊かな未来の富山湾を展望しよう」とした。内容は、会の活動紹介、海老江での藻場造成、富山湾の水中写真、射水平野の歴史、内川付近の水質調査、富山湾の海流と潮流調査、海浜植物の生育状況などである。展示は射水市中央図書館(7月20～29日)と図書館に隣接する喫茶店「ルチャナ」(8月3～15日)で行い、展示内容を紹介するセミナーを文化ホール「ラポール」(7月25日)で開催した。10月18日(日)には海老江海岸のウォーキング(足洗潟公園→海老江神明宮で絵馬の鑑賞→海浜植物の観察→藻場造成地における現況の説明→海の駅SAZANで昼食交流、約4km)を実施した。展示会、セミナー、ウォーキングとも熱心な参加者を得たが、さらに若い人へのアピールが大切であると感じた。梶田隆章さんも富山県民向けの色紙で「富山の自然を通して、自然の不思議を感じて下さい。それが自然科学への入り口です」と書いているように、今後も市民と共に富山湾の神秘性に触れてゆきたいと思う。



①② NPO法人富山湾を愛する会の活動紹介(射水市中央図書館)
③ ウォーキングin海老江海岸
④ 海老江神明宮の生業絵馬(鯨の捕獲)
⑤ ウォーキングで観察したハマナスの果実

射水市海老江の海岸

会員 矢後昭男(海老江地域振興会会長)

私達が住む海老江地区は新湊大橋の東、新湊ベイエリアの東部にあります。さて、この海老江地区は東より練合、七軒、東町、中町、西町、浜開と6町で構成され、いずれの町内も海岸に接し東西約3km余りのコンパクトな地域であります。

夜明け前、海岸に来て一望のもと見渡すと西に新湊大橋、新湊マリーナ、海老江海浜公園、東に目を向けると雄大な立山連峰がそびえ立ち、その隙間から太陽が昇り始める光景をよく見ることができます。まさに射水市の夜明けがこの海老江地区からはじまると自画自賛しつつ、自然の恵みを浴びながら一日のスタートが始まります。

この海老江海岸は、練合地区から西町地区にかけての階段式護岸、射水市で唯一の公設海水浴場、浜開地区にかけての海浜公園へと連なっています。また、海岸線に沿って住宅が密集しており、浪害から住民を守るため波消し堤が設置され、砂の飛散を防ぐための防砂林が植栽されています。

海岸の環境を守るため海浜公園の美化委員会は年間を通して清掃活動や緑地管理など環境美化に努めております。また、各町内ではボランティアが清掃活動を行い環境維持に取り組んでいますが、荒天時には一変してゴミの集積場となるためその対応に大変苦労しております。関係機関には地元の負担軽減に一層の支援をお願い致します。

私達の先人や先輩からはかつての海老江海岸は、砂浜広く海辺までの距離が長く素足では足の裏が熱くなり走って行けなかったと聞きました。そんな砂浜では子供たちが無邪気に駆け巡り、野球をしたり、地域あげて運動会をして楽しく遊んだということです。いつかこの浜辺にもかつての青い海、そして夏にはひる顔が咲きほこり、広くてきれいな砂浜がもどってきて欲しいものです。海と親しみ自然と共生できる日が来ることを願いながら各町内のあちらこちらで今も清掃の奉仕活動が行われています。

「富山湾のさかな」雑感

会員 宮谷大作

平成28年1月に私の住んでいる富山市呉羽では積雪が最大で40cmぐらい、時間とともに少なくなり、雪かきも簡単で過ごしやすい冬だった。地球温暖化の所為かもしれない。

新聞報道によれば、今年は「氷見寒ぶり宣言」がなされなかった。その原因として、暖冬のため、海水温度が上昇し、冷水や暖流の方向が変化し、また渦流が発生するなど回遊魚の“ぶり”(英語名:Yellow tail)が富山湾に入り込まなくなったためと言われている。富山ブランドの「寒ぶり」が無くては漁師の方のもとより、富山の観光にとっても大損害である。自然現象はあくまではない。鳥取堺港の今年のぶりの水揚げは昨年のお二倍と聞いている。数は減っていないと思われる。なんとか富山湾に回遊することを願うばかりである

出世魚のぶり(ツバイソ→コズクラ→フクラギ→ガンド→ブリ)をはじめ、ベニズワイガニ(Red queen crab)、ホタルイカ(Firefly squid)、シラエビ(ヒラタエビ)(Japanese glass shrimp)等など日本いや世界に誇る富山湾の魚は貴重である。今後も持続してとれてほしい。

最近、魚津のウマズラハギ(Black scraper)が「魚津寒ハギ(如月王)」としてブランド化された。また、新湊のマコガレイ(Marbled sole)のブランド化も進行中と聞く。富山湾の魚として期待したい。

余談ではあるが「カレイ」について思い出がある。十数年前、仕事でウラジオストークに出張した。そのうちの一日、海洋研究所の人と釣りに行った。町から車で約一時間、ある漁村に着き、そこで漁船に乗り換え約15分で釣り場に着いた。道具は板に巻いた道糸に重りと釣り針がついた簡単なもので、餌は貝

の身である。船上から糸をたらし“こつん”と感じて海底に達した(およそ20m)ことを確認し、次に10cmほど引き上げる。これで待つこと1~2分、大きな当たりがあり、糸を巻き上げると20~30cmのカレイが上がってきた。感激であった。約2時間で20~30匹釣り上げた。カレイは研究所員に分けたので私は食していない。カレイの種類、正確な場所はわからない。釣の面白さを十分堪能し楽しめた。

魚の漢字を広辞苑、新漢語林で調べると一般に“うお”“さかな”“ぎよ”の読み方がある。魚(うお)市場、魚(ぎよ)類などの読み方は定着しているが、食する魚は“さかな”が一番と感じている。従って題字もひらがなにした。さかなを“とる”の漢字も難儀である。獲る、捕る、取る、採るなどいろいろあるが、ひらがなの“とる”は感じが出ていると思う。

蛇足ながら、ホタルイカが天然記念物であると誤解している人のために。1952年、発光という特殊な生態をもつホタルイカが大量に漁獲される海面を保護する目的で「ホタルイカ群遊海面」として「特別天然記念物」に指定された。従って、ホタルイカは天然記念物でないのどったり食べたりしてもよい。

立山連峰から標高差4000mの富山湾は天然の生けすであり、さかなの宝庫である。冷凍技術、輸送手段がいかに進歩しようが、地元で“きときど”の“さかな”を持続的に食することは最高の幸せである。

<参考にした資料>

- (1)「とやまの魚たち」 津田武美 新湊市民文庫7(平3年)
- (2)「富山のさかな」 魚津水族館(平26年)

日本の深海湾というと富山湾、駿河湾、相模湾の三つが知られている。富山湾と駿河湾は日本の深海湾として纏められるが後述するようにあまり似ていない

富山湾には深海生物としてベニズワイガニ、オオエッチュウバイ、カガバイ、ホタルイカなどが知られている。非常に種類が少ないのが特徴である。富山に来て間もなくの頃手元に対馬暖流調査という厚さ3~4cmの資料集があった。それを見ると、深さ200~300mから水温は2℃前後に固定されているので、これは使用した温度計が壊れていると思っていた。

その後日本海は表層の対馬暖流とそれ以深の日本海固有水に分かれることが解り、暖流と寒流が混在していると考えなくて良くなった。日本海固有水はシベリアのアムール川などが融雪期に運ぶ冷水が表層の海水を冷却しそれが重くなって日本海に貯まり形成されたことが明らかになった。その証拠として駿河湾などに比べて深海の生物がほとんどいない。外洋と混じら

ないので外海の生物が進入できず、生物種が極端に少ないことが特徴である。

反対に駿河湾は相模湾と共にフィリピン海プレートが本州のプレートに衝突し丹沢山塊や伊豆半島を付加したので駿河湾と相模湾の深い湾が2個形成された。外洋に通じているので富山湾に比べて深海にすむフカやサメが多く住んでいる。

駿河湾は駿河トラフから南海トラフへと太平洋の深海に続いている。そのため閉鎖された日本海と違って深海生物が浸入可能である。

魚は水温に左右され、暖かい浅海を好むもの、冷たい海にも住める者に分けられ、後者の中に多くのサメ類が知られている。また水圧も大きく生息環境に影響するが、それらの障壁を乗り越え2500mの水深から200~300mの水深まで往復出来るサメも知られている。



富山湾の海中点描 3

会員 大田希生

(1) ナイトダイビング

夜間のダイビングでは、日中は姿を現さない夜行性の生き物が多く見られます。夜行性動物たちの神秘的な生態は、ダイバーの好奇心を満たします。



(2) ヌタウナギ(滑川:高塚沖)

水中ライトの眩しい光に敏感なのか、岩陰から突然猛ダッシュで泳ぎだしてダイバーを驚かせます。手で捕まえると、ぬるぬるの粘液を出します。



(3) アオリイカ(魚津:大町沖)

イカの仲間は警戒心が強く、日中はなかなか近づいて撮影出来ませんが、突然のライトの光に幻惑されたのか、しばらく逃げずにじっとしていました。刻々と変化する艶やかな体色が美しかったです。



(4) メリベウミウシ(魚津:経田沖)

色彩や形が変化に富んだウミウシの中でも、奇抜さでは群を抜く見た目を持ちます。日中は石の裏に隠れていますが、夜間は頭巾のような袋状の口で海藻の上の小動物を食べます。



(5) ヨシエビ(富山:四方沖)

日中は砂に潜って隠れています。夜間は活発になります。光が当たるとじわじわと砂中に潜っていき、最後は目だけを出して、周囲を警戒しています。



(6) ヒメセミアエビ(滑川:高塚沖)

セミのような形のエビです。



富山県には海技士養成機関として、かつては二つの県立水産高校と、国立の富山商船高等専門学校があった。現在は、近年の国立高専や県立高校の統合再編のため、国立富山高専専門学校商船学科と、富山県立滑川高等学校海洋科、氷見高等学校海洋科学科の3校となっている。

ここで、これらの学校の練習船の起源について、触れてみたいと思う^{(1),(2)}。江戸時代末期から明治初期は、日本が、これまで長く続いた鎖国を解き、海外との貿易や遠洋漁業のために遠洋航路に対応した船舶の建造と、このための船舶職員養成を急務とした時代であった。そこで、古くから日本海沿岸の北前船貿易の拠点であった伏木富山では、まず明治33年(1900年)に富山県水産講習所(後に、富山県立水産高校となり、現在は富山県立滑川高校海洋科に引き継がれる。)が設立された。そして、幾多の航海士・機関士を養成してきた国立富山商船高等専門学校(現在は、富山高等専門学校商船学科)の起源である富山県立商船学校が、明治39年(1906年)に創立された。

この時代は、まだ世界の海を多くの帆船が航走していた時代である。日本の近海では北前船と称される和式帆船が多く航海していたが、現在の航海訓練所の練習帆船「日本丸」、「海王丸」の原型となる、洋式帆船が段々と増えてきた時代である。そして、船員教育も、こうした洋式帆船を用いた、当時の英国流を取り入れることとなった。そして、海運と漁業で発展していく伏木港の小矢部川河口に、天保4年(1833年)小型木造船の修理を手がけた吉村造船所が設立され、現在でも造船業を行っている。この時代には各地で商船学校が設立され、海技免許取得のための教育基準が整備され、航海士養成課程では洋式帆船の模型を用いた運用学の授業や、練習船や民間委託の社船による帆船実習も必須となっていた。このため、富山県立商船学校では、明治41年より、伏木・直江津間の定期航路船「北越丸」(150トン)を譲り受け、これを係留練習船として、洋式帆船の取り扱いの実習を行った(写真1)。そして、「北越丸」は、大正9年9月に用途廃止となった。

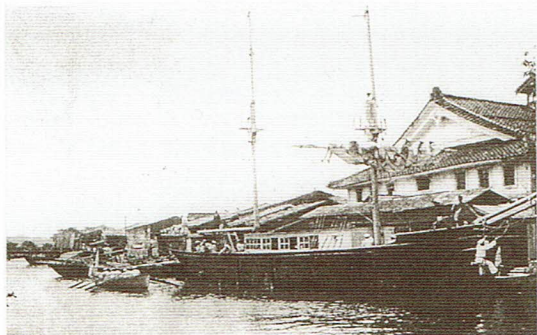


写真1 明治42年の富山商船学校裏にあった、係留練習船「北越丸」(150t, 大正9年9月に用途廃止)における総帆実習と周囲水域での端艇実習⁽¹⁾

一方、富山県水産講習所では、明治41年(1908年)に初代練習船として、吉村造船所において、2本マスト・トップスルスクーナ型帆船の「高志丸」(94.21トン)を建造した(写真2)。この「高志丸」では、遠洋漁船における船舶職員養成を行いながら、蟹工船技術の基盤を作り上げたものである。そして、この成果を引き継ぐために、二代目練習船の3本マスト・トップスルスクーナ型帆船の「呉羽丸」(171.9トン)を東京月島造船所で大正9年(1920年)に建造した(写真3)。この「呉羽丸」は、当時の地方水産・商船学校の練習船としては、最大級であった。この背景には、当時の富山県が漁業振興に相当の重きをおいていたと考える。「呉羽丸」は練習船として活躍を続け、昭和4年2月に民間業者に払い下げとなった。

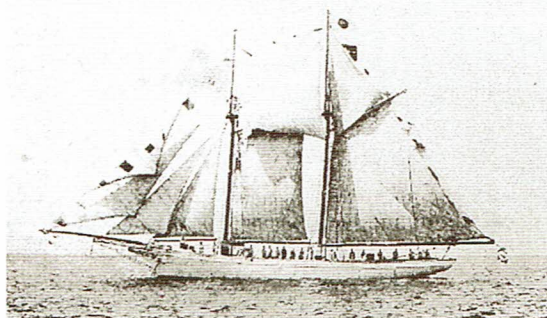


写真2 明治41年建造の富山県水産講習所の初代練習船「高志丸」(94.21トン, 大正9年2月に廃船)⁽²⁾

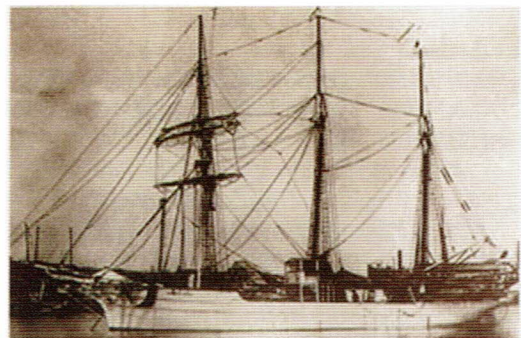


写真3 大正9年建造富山県水産講習所二代目練習船「呉羽丸」(171.9t, 昭和4年民間会社に払い下げ)⁽³⁾

この時代には、富山商船学校では専用練習船は持たず、乗船実習は民間委託といった形式であった。しかし、全国の商船学校の学生のために、昭和5年(1930)に練習帆船「日本丸」、「海王丸」が建造された。「海王丸」は、練習船として就航して以来、59年活躍し、1989年の保存決定時には大阪市との2か所で交互に展示することになっていたが、当初展示された新湊市(現射水市)で永続的に船舶として係留保存されることになり、青少年の育成や海事思想の普及に貢献している。

ここで、富山高専や富山県立滑川高校の生徒の海技関連の実習・見学にも多く活用されている。写真4には富山高専学生による総帆実習、(公財)伏木富山港・海王丸財団所有の6mカッターによる、富山地区の女子学生中心のカッターレースの様子を示す。ここで、写真1に明治42年の係留練習船における光景が、現代において再現され、こうした練習船の高い教育効果が確認できる。

<参考文献>

- (1)富山商船高専百年史編集委員会:「富山商船百年史」,富山商船高等専門学校,2009.12.
- (2)富山県総合教育センター:「富山県漁業実習のあゆみ」,2012.3.



写真4 富山高専学生による、「海王丸」のマストに登っての高所作業・総帆作業、(公財)伏木富山港・海王丸財団所有の6mカッターによるカッターレース

1 はじめに

今年は射水市がメイン会場となって全国豊かな海づくり大会が開催され多くの人が富山湾に注目した。当会も「射水市豊かな海を愛する会」と連携して藻場の保全と教育啓発事業に携わった。

藻場保全に関しては昨年に引きつづき射水市海老江地先において藻場造成実証試験を継続した。潜水観察を行い海藻の毎月の生育状況と実験機材の保守を行うとともに周辺の中景観を記録した。

4月に射水市海老江地先の海でアマモ苗の移植事業を実施した。海洋環境保全の意識高揚へ向けた県の支援を受け、前年11月から射水市立東明小学校、片口小学校、新湊小学校の児童がアマモの苗を育て、氷見高校の生徒諸君が水中移植作業を行った。適切な移植時期と牡蠣殻を使った根固めが功を奏し、移植されたアマモは順調に生育した。

マクサとアカモクが母藻投入周辺岩場に自生するようになった。作業を継続した成果と考えられる。当実験域における海藻の成長にはいくつかの阻害要因があるが、設置したスポアバッグや海藻表面の泥様の付着物が何ものか究明する必要がある。ある人は藍藻の類というがいまのところ正体不明である。

今年度は人工リーフの南東隅を新たな実験区域に定めた。母藻を移植してウニなどの食害生物を集中駆除した。採捕したウニは農園で土壌改良肥料として活用している。

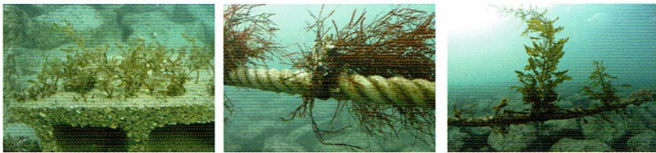
海洋の教育・啓発に関連して講演、活動内容の展示会、公開セミナー、海辺ウォーキング、海藻おしぼ教室の開催を行った。

また、海老江海浜公園の砂浜に自生する海浜植物の状況観察を例年通り実施した。

2 藻場造成実験海域の特性(2015年1月～2015年12月)

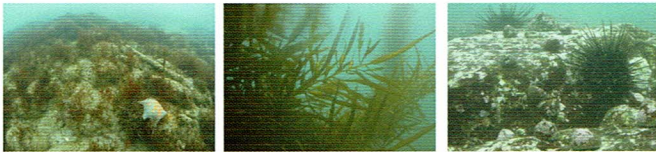
植栽している海藻はアカモク、ヤツマタモク、イソモク、クロモ、マクサである。アカモクとマクサは周辺海域で採取して母藻とし、ロープに取りつけたり、スポアバッグに入れて移植した。以下に毎月の海藻の生育状況等を示す。

2015.1.5



アカモクは食害のため小さい 天然マクサのロープ移植 ロープで成長するアカモク

2015.2.22



自生する多数のアカモク幼体 25年ロープのアカモク生殖器床 新エリアのウニと巻貝

2015.3.3, 3.16



天然マクサ スポアバッグのアカモク(生殖器) ウニの除去重点区域を設定

2015.3.30



ブロック・アカモク幼株の成長良好 前年にロープ移植したアカモク 同マクサの生育良好

2015.4.25



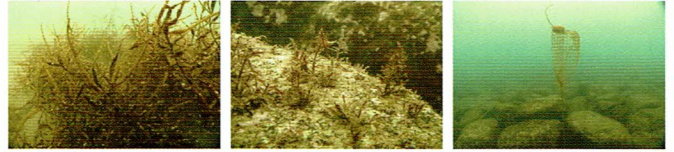
バッグやアカモクに浮泥が付着 バッグの損傷も見られる クロモのような紐状の個体と小さな緑藻が基質一面を覆う 消波ブロックのワカメ

2015.5.30



母藻移植アカモクの生殖器床 新実験エリアのスポアバッグ クロモ(ゴロタの石場)

2015.6.26



移植したアカモクの成長 自生するマクサ 空になったスポアバッグ

2015.7.2



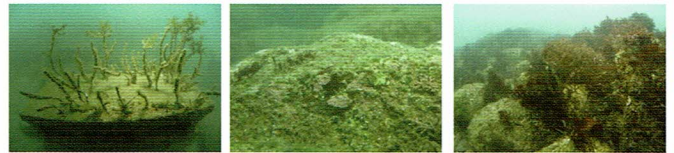
ロープのマクサ、ヤツマタモク、ミル 礎石に自生する紅藻 新エリアに自生するマクサ

2015.7.26



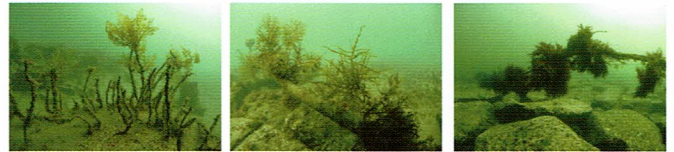
ロープに移植したアカモク 食害生物の除去 新エリアのマクサ(巻貝あり)

2015.8.30



ブロックの夏枯れアカモク 新エリアの緑藻と泥(紅藻はない) ゴロタ石のマクサ場

2015.9.23



ブロックで更新するアカモク ロープのヤツマタモクとノコギリモク 移植ロープで繁茂するマクサ

2015.10.24



茎高50cmに成長 近くの岩場にアカモク若芽 ロープのアカモクも元気

2015.11.1



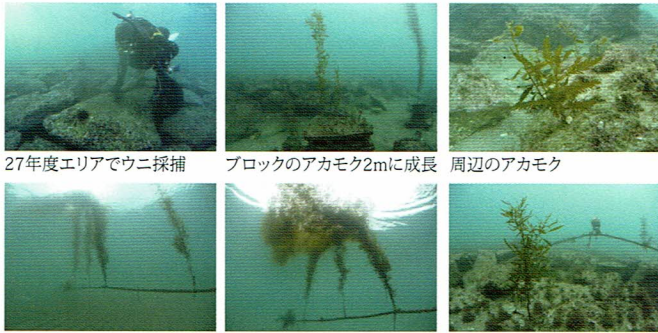
ブロックのアカモク ブロック周辺の自生海藻 ロープ周辺の自生海藻

2015.11.1



ブロックから採取したアカモクの移植 移植後のロープ

2015.12.15



27年度エリアでウニ採捕 ブロックのアカモク2mに成長 周辺のアカモク

先月(11月1日)移植のアカモク 2mに急成長 基質で自生するアカモク

3 藻場づくり作業と教育・啓発活動の記録

2015年1月26日

海藻の食害生物除去作業を行った。冷たいがウネリがなく絶好の作業日和。ウニは梨農園の土づくり及び肥料(梨の果皮を強くする)に活用中。7人参集(0700~1000)、水温12度。



ウニの除去作業を行う 採捕したウニ2かごは肥料に 海老江漁港岸壁のアカモク

2015年3月2日、3日

藻場づくり作業(海藻の移植)を行った。2日の潜水では実験海域で縄の張替と小型巻貝2囊を採捕した(1400~1600)。3日はアカモクのスポア・バッグ15個を作成し、実験海域に設置した(0700~1100)。11名参集、風、気温0度、水温11度。



ミゾレ、縄の張替と巻貝の採捕 アカモクの母藻を採取 スポアバッグの製作

2015年3月21日

磯部宏氏(射水市海づくり推進班班長)が第210回富山湾に学ぶ会例会(とやま市民交流館)で講演。全国豊かな海づくり大会の開催意義、射水市の漁業の特色、富山湾に活かされた射水市という郷土愛に満ちたお話であった。



射水市の海を熱く語る磯部氏

2015年3月30日

食害生物の除去および実験資器材の点検を行った。人工リーフ南東隅に新たな実験区域を設定し、場所を指示する。大量のウニを採捕したが、ほとんど身入りがなく(0630~0930)。岸壁のアカモクはいつの間にか姿を消していた。10名参集、晴れ。



打ち合わせ時刻に10名が参集 人工リーフに向う 採捕したウニと小型巻貝

2015年4月28日

アマモ苗の移植を行った。県が支援する海の森づくり事業として射水市の小学生がアマモの苗を育て、氷見高校の生徒が海老江地先の海に移植した。苗の固定に牡蠣殻を使用する工夫がなされた。



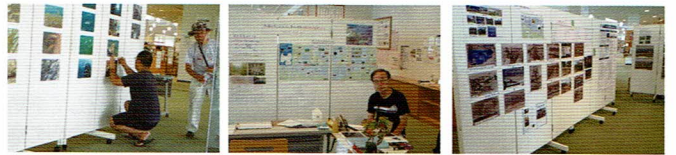
苗を手渡す東明小学校6年生 受けとった苗を移植する氷見高生 全国豊かな海づくり大会へ向けて

2015年6月10日

NPO法人富山湾を愛する会の第7回通常総会を開催した(株・アイベックにおいて)。

2015年7月20日~29日

NPO富山湾を愛する会活動内容の展示会を射水市中央図書館ギャラリーにおいて開催した。藻場造成の試み、水中カメラマンが見た海中の四季、内川の水質環境調査、富山湾の海潮流観測結果、海老江海岸・岩瀬浜における海浜植物の生育状況を紹介した。



会場準備(7月19日) 訪問者に対応する林節男会員 展示会場

水中カメラマン大田希生会員のパネルより。「私たちの海一富山湾は四季折々に豊かな表情を見せてくれる美しい海です。しかし海中では多くのごみを見かけることもあります。私たちの心がけでこの海をもっと美しくできるのではないのでしょうか。」

2015年7月25日

NPO富山湾を愛する会の公開セミナー(射水市文化ホール研修室)を開催した。海の日と全国豊かな海づくり富山大会を迎えるにあたり、当会と富山湾のかかわりで4つの報告を行った。

1. 本会の紹介、富山湾の特性と海老江海岸における藻場造成の試み(石森繁樹会員)
2. 水中カメラマンがみた富山湾の四季(太田希生会員)
3. 富山湾と射水市海老江地区の今昔と海浜植物の観察(林節男会員)
4. 射水市内川付近の流れと水質環境調査、汚染フローの紹介(奥川光治会員)

以下は質疑応答にみられた意見である。

- 内川の水質改善に庄川から浄化用水を引いているがより効果的な導水・排水はできないか。
- 水質改善運動など街づくりには地元の郷土史をよく読み歴史を見直す必要がある。
- 食害を防ぐため採捕したウニの活用策として、深層水を利用した養殖を試みたらどうか。

意見交換の中には、日本海固有水の特徴は溶存酸素量が低いことといった認識違いもみられた。



休憩時の交流、屋外は猛暑

2015年7月26日

食害生物の採捕とモニタリングを実施した(0530~0900)。捕獲ウニ150個中に山椒ウニが1個体混じる。小型巻貝多数。参集者8人、透明度良好、大変暑い。



事前打ち合わせ 藻場づくり場に出航 採捕したムラサキウニと巻貝

2015年7月31日

「水産多面的機能発揮講習会」(金沢商工会議所)に参加した。水産庁、全国豊かな海づくり推進協会の挨拶に続き、石川、福井、長崎、三重、静岡の地域協議会や活動組織から実践報告が行われた。「射水市豊かな海を愛する会」の活動も報告した(林、石森会員)。

2015年8月7日

「海と森を学ぶ子ども記者ツアー」(北日本新聞社、富山テレビ主催)事業に協力し、富山湾の藻場が果たす役割について話した(石森会員)。新湊漁業協同組合議室に持ち込んだ褐藻、紅藻、緑藻を手にした豆記者たちは海藻の色合いを不思議そうに見つめていた。

2015年9月23日

藻食生物(ウニと小型巻貝)の駆除作業を行った。天気は良好であったがウネリが残り、波に酔うダイバーもでた。捕獲したウニ(4籠)は農園の肥料として活用している(06:30~09:30)。参加者10名、水温22.5度。



漁港岸壁に参集したダイバー 舟艇で人工リーフに向かう 採捕したウニの陸揚げ

NPO法人「富山湾を愛する会」活動の1年

2015年10月4日

富山県第39回視覚障害者文化祭において講演「富山湾と海の幸」を行った(石森繁樹会員)。富山県視覚障害者福祉センターにおける聴講者の前向きな姿勢と活発な話し合いに感銘を覚えた。

2015年10月18日

「海辺ウォーキング in 海老江」を実施した。足洗老人福祉センター、海岸道路、練合(ねりや)神明宮、海老江海浜公園の約4kmを散策した。神明宮では宮総代の五十嵐繁氏と山田克二氏から絵馬と当地域の歴史について伺った。この鯨絵馬は昭和10年に練合の浜で鯨が捕獲された御礼として奉納されたものという。また、海上安全と大漁を願い境内には、海の方を向いて鳥居が建てられている。



五十嵐繁氏から説明を受けた 海上祈願の石碑 海に向けて建立された鳥居

2015年10月24日、25日

第35回全国豊かな海づくり大会—富山大会—が天皇后両陛下御臨席のもと射水市で開催された。海王丸パークでは各種の展示がなされ、急潮予報など水産・海洋関連の新たな情報が紹介された。体験コーナーでは海藻おし葉教室にたくさんの人が集まった。海上歓迎・放流行事に招待され、海王丸パークの会場で式典行事を観覧し、ヒラメとキジハタの稚魚を放流した。展覧した海王丸と岸壁に整列した新湊名物の山車が美しかった。心配された天候にも恵まれ大会は成功裡に終了した。



企画展示・体験コーナー(海王丸パーク) 富山県栽培漁業センターのブース(24日) 海上歓迎・放流行事会場からみた曳山 同行事に参加した会員(25日) 翌日に寄り回り波が来襲(26日)

2015年11月1日

ロープを移設しアカモク母藻を移植した。実験海域の基質岩で自生するアカモク幼体が広範囲で視認できた。アマモはしっかり根付いた(0800~1130)。参加者3人、水温19度。



海老江海浜公園 アマモの観察 アカモクをロープに移植する

2015年12月1日

海藻おしば教室を射水市下村小学校で開催した(1330~1500)。講師は海藻おしば協会会長の野田三千代氏。先生から海藻の種類や藻場の大切さを学んだあと3、4年生の児童27名はテングサやアオノリなど10種類の海藻を使って海藻おしばづくりに挑戦した。1週間後に届く作品が、未永くみんなの良い思い出になることを祈りたい。関係者40人が参加。



ワカメ標本を手にする野田先生 楽しい海藻おしばづくり 記念の集合写真

2015年12月8日

新エリアのウニを採捕した。舟艇のエンジン・トラブルでやむなく作業を中断した(0700~1100)。海老江漁港所属船の網に多数のサルバ(尾索動物門)がひっかかる。湾内にサルバが大量発生か。参加者8名、水温13度。



新湊漁協海老江支所岸壁7時集合 人工リーフへ出航 ウニの捕獲

4 海老江海浜公園の海浜植物

今年も月初めに西側砂浜に自生する海浜植物の生育状況を記録した。ハマゴウが根茎を張って群落(20m×10m)を形成し暖候期に青紫の美しい花をつけた。少数であるが食用になるハマボウフウも生えていた。



5 おわりに

特筆すべきは全国豊かな海づくり大会が地元射水市で開催されたことである。車と人で混雑する海王丸パークの賑わい、式典行事、海上歓迎・放流事業、各種の展示企画の盛り上がりを見ていると水産多能的機能が一堂に現出した趣きがあり頼もしさを感じた。このイベントが一過性のお祭り騒ぎに終わることなく、県民の海への関心が高まる機会になるよう祈りたい。

当会の活動も予定通り進行した。藻場づくりを標榜して母藻の移植、機材の保守、観察、記録報告を行ってきたが、今年はマクサとアカモクの子供が岩で独り立ちする姿に接することが多かった。アマモの順調な生育も今年が初めてであった。田植えの頃がアマモの移植にも適しているのであろうか。氷見高校岡田先生(会員)の牡蠣殻を使った工夫が好結果を生んだ。会の活動は例年誌で紹介しているが、今年は展示会と公開セミナーを開き積極的な交流に心がけた。その結果、参加した方々の意見を直に聴くことができて参考になった。

会の活動も7年が経過したが、来年は海藻に加えて海老江の海の微細藻類も観察したい。昔は海老江でよく魚が獲れたという。魚が少なくなった理由として水温上昇、築港、下水の終末処理場建設等が話題になるが魚の餌のもととなるプランクトンへの言及が全くない。海水一滴の中には無数の生物が住んでいるという。微細生物の調査を行いたい理由である。

今年も多くの方にご支援とご協力をいただいた。小学生を対象とした海藻おしば教室の開催では海藻おしば協会会長の野田三千代氏に大変お世話になった。海老江漁協の皆さんには作業上のご理解とご協力をいただいた。藤岡農園代表藤岡生明氏にはウニの活用にご協力いただいた。射水市豊かな海を愛する会事務局の磯部宏氏、南貴幸氏、新開佐和子氏には活動を進める上で特にお世話になった。以上の関係各位に衷心より感謝を申し上げる。

最後になるが、本会の創設者である高見貞徳氏には長期間の会運営にあたり物心両面でありがたい支援を賜った。あらためて厚く謝意を表する次第です。(文責 石森繁樹)

富山湾を愛する者が集い、魅力ある「未来とやま」「安心とやま」の事業構成に貢献します。

NPO法人 富山湾を愛する会

〒931-8326 富山市上野新町5-4 (株)アイパック内

TEL: 076-438-4116 FAX: 076-438-4301

URL: <http://www.merci-toyama.jp/>

発行年月日: 2015年3月25日